

PARNASSIUS

No. 34

目 次

アゲハチョウ類のオニユリにおける吸蜜活動.....	堀 田 久.....	1
オジロサナエを上灘で採集.....	堀 田 久.....	2
淡路島でイナゴの大発生.....	竹 田 俊 道.....	3
タマムシ幼虫の食樹について(2).....	堀 田 久.....	4
南淡町黒岩でイシガケチョウを採集.....	藤 富 正 昭.....	4
常隆寺山でマイコトラガを発見.....	登 日 邦 明.....	4

淡 路 昆 虫 研 究 会

ENTOMOLOGICAL ASSOCIATION OF AWAJI

HYOGO JAPAN

September 1988

アゲハチョウ類のオニユリにおける吸蜜活動

堀 田 久

1. はじめに

洲本市安乎町の筆者宅の花畑には、オニユリの小群落(約60本)があり、毎年7月中旬から下旬にかけて開花している。今年(1988年)は例年より少し遅れて、7月20日に開花し8月8日まで花が見られた。この時期は、ナガサキアゲハやモンキアゲハの最盛期とも一致していて、アゲハ類が数多くオニユリの花を訪れるので、吸蜜の日周期活動などについて調べてみることにした。

2. 調査の期日と方法

オニユリが開花した7月20日から、毎日花に飛来するアゲハ類を観察したが、時刻を決めて個体数を正確に調査したのは、8月2日だけである。この日は6時より18時まで、2時間おきに10分間ずつ訪花するアゲハ類の個体数を種類別に記録した。なお、一度訪花したチョウが飛び立って再度訪花した場合については、確認できる範囲内を飛しょうして再度訪花したものは、同一個体として扱った。

オニユリへの訪花個体数調査結果

種 類	時 間		6:00	8:00	10:00	12:00	14:00	16:00	18:00	計
	天 気		6:10	8:10	10:10	12:10	14:10	16:10	18:10	
	温 度		薄曇	薄曇	晴	晴	薄曇	薄曇	晴	
			24℃	27℃	30℃	31℃	30℃	30℃	27℃	
キアゲハ					1	2		1		4
ナミアゲハ				1	2	2	1			6
モンキアゲハ	1			3	2	2	3	1	2	14
クロアゲハ					1			1		2
ナガサキアゲハ	1			1	2	3	6	6	1	20
計			2	5	8	9	10	9	3	46

3. 調査結果

(1) 時刻による個体数の変動

早朝や夕方には訪花する個体数は少ないが、10時から16時にかけては、アゲハ類全体としての個体数にそれほど変動がなく、午前と午後での吸蜜活動には顕著な差が見られなかった。ただ、ナガサキアゲハは午前よりも後に吸蜜する個体数が約2倍に増加している。しかし、これは1日だけの調査結果であり、またこの日の気温は10時から16時まで、あまり変化がなかったため、今後もっと詳しい調査をしたいと思っている。

(2) 吸蜜時間

ごく短時間訪花してすぐに飛び去る個体もあるが、観察をしていた10分間、初めから終わりまで同じ花で蜜を吸っていたものもあった。なお、新鮮な個体よりも、羽化後日を経て羽のいたんだものの方が吸蜜時間が長かった。

(3) チョウの種類と個体数

ナガサキアゲハとモンキアゲハの訪花個体数が多いのは、夏型第一化の最盛期でもあり生息する個体数が多いため、他のアゲハ類と比較して特にオニユリの花を好むからではないと思う。クロアゲハは8月2日の訪花個体数は少なかったが、7月下旬には訪花するクロアゲハもかなり見られた。アオスジアゲハは、花畑の周辺で時々見かけたが、オニユリの花を訪れることは一度もなかった。なお、カラスアゲハは今年は全く見られなかったが、年によっては少数ながら吸蜜していたことがある。

(4) オニユリと他の花との比較

オニユリが開花している期間、この花畑とその周辺には、ダリア・キクイモ・ムクゲ・キキョウ・ニチニチソウ・アサガオ等の花も咲いていたが、アゲハ類はオニユリ以外の花を訪れることはほとんどなく、飛来してもごく短時間で飛び去っていた。しかし、オニユリの花が終わってからは、他の花でも盛んに吸蜜していたので、アゲハ類(パピリオ属)がオニユリの花を特に好んで訪れることは確かである。それは、オニユリの花の色彩や形、香気などがアゲハ類の訪花の条件に適している上に、蜜の量も多いためであると思われる。

オジロサナエを上灘で採集

オジロサナエ *Stylogomphus suzukii* は、淡路島ではこれまでに、洲本市猪ノ鼻川で幼虫(石原ほか, 1974)、洲本市鮎屋ダムで1♂(竹田, 1979)記録されている。

筆者は1986年8月8日に、洲本市上灘相川の溪流で本種の雄を1頭採集したので報告しておく。なお、標本は筆者が保存している。

(堀田 久)

淡路島でイナゴの大発生

竹 田 俊 道

島内で、イナゴの多く見られたのは、昭和30年代の前半までで、この頃までは、イナゴを食したという人もかなりいた。

南淡町福良で、昭和42年頃まで見たという話も聞くが、いづれにしても、その後は絶滅したものとされた。それが今年の8月に入って、本会会員の藤富正昭氏によって北淡町育波でイナゴの群棲が報じられるや、南淡町刈藻でも、数千匹の群棲を確認するに至った。実に30年振りである。

一旦、絶滅していたものが、他から持ち込まれて増えたものか、細々と生息していたものが急激にふえたものか、定かでないが、筆者の調査では、前者であろうと考えられる。ただ、今回島内で確認されたイナゴは、全てハネナガイナゴであり、これまでの兵庫県下の記録はコバネイナゴだといわれている。(藤富氏談)。

昭和30年代の島内でのイナゴが、果たしてどちらだったのか、確かな記録がなく不明だが、これも意見は二分されていて定かでない。もし、この頃の標本・記録をお持ちの方がいれば、是非ご一報頂きたい。

現在、島内での発生密度は、刈藻が一番高く、青刈田の点在、農薬散布が少ない等の条件が適合しているものと思われる。

地元の話では、4年程前から少し見られたとの事で、筆者も1979年10月21日、阿那賀でハネナガイナゴ1♀を採集しているが、この時は、フェリーで持ち込まれたものと想定していたが、既に発生していた可能性も考えられる。

参考までに、県下の記録も挙げておくと、丹波・篠山盆地では、1974年秋から急激にイナゴが増え(小林桂助氏)、筆者も1975年11月に多数採集している。この時は全てコバネイナゴだったが、モズのはやにえで、コバネイナゴ、ハネナガイナゴの両方を記録しているし、赤穂市千鳥ヶ浜でも、ハネナガイナゴのはやにえを報告している(小林桂助、鳥と自然 第36号)。

タマムシ幼虫の食樹について (2)

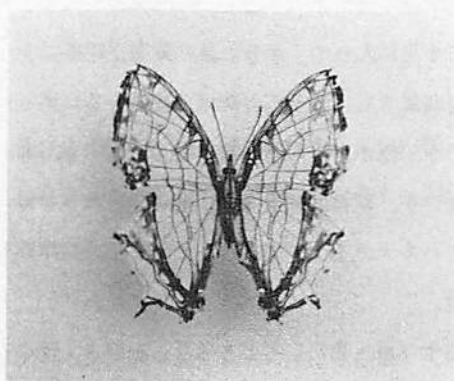
筆者は本誌30号で、タマムシ *Chrysochroa fulgidissima* 幼虫の食樹としてヤブニッケイとビワを報告した。1988年7月5日には、洲本市安乎町のナルトミカンの枯枝の中から、前羽のまだやわらかい本種の成虫を1頭採集したので記録しておきたい。(堀田 久)

南淡町黒岩でイシガケチョウを採集

1988年8月8日、兵庫県三原郡南淡町灘黒岩において、道端の雑草上に、翅をひろげて静止しているイシガケチョウ *Cyrestis thyodamas* の夏型1♀を採集したので報告する。(写真)

当日、カンキツ害虫の調査で同地を訪問していた私にとっては、記念すべき出会いであった。

(藤富正昭)



常隆寺山でマイコトラガを発見

本年(1988)4月16日に淡路島北部の常隆寺山(alt. 515m)の山頂付近で燈火採集を行った際、マイコトラガ *Maikona jezoensis* 1ex. が飛来した。しかし、残念ながら写真撮影の準備をしている間に見失ない、採集することができなかった。

筆者は先に淡路島に於ける本種の分布をまとめたが(本誌 No.30, 1984)、その後、藤平明氏(南淡の蛾, 1987)が南淡町阿万からも記録しているので、今回の記録も含めて、淡路島内での本種の産地は合計7ヵ所になる。

(登日邦明)

編集後記

▽今回は予想外に原稿が集まらず、ページ数の少ないものになりましたが、悪しからずご諒承下さい。
▽去る9月5日、兵庫県は島の全域、すなわち59785 haを対象とする“淡路島リゾート構想”を国へ申請しました。これが承認されると、島の自然は修復不可能なダメージを受けることは必至です。破壊される前に、開発予定地内の自然や虫達の姿を、例え断片的にせよ少しでも多く記録に留めておきたいものです。

▽次号は来春発行予定です。どしどし原稿をお寄せ下さい。

(T)

PARNASSIUS No. 34

1988年9月16日印刷

1988年9月20日発行

編集者 登日邦明

発行所 淡路昆虫研究会

〒656-21 兵庫県津名郡津名町大町畑235 登日方

郵便振替 神戸7-49591

印刷所 れいめい社

〒656 兵庫県洲本市本町5丁目1-24